

K・リーゼンフーバー著

『中世哲学の源流』

創文社，1995年，xiv+704+32頁

宮内久光

本書は十八章から成る700ページを超える大著である。1985年から95年にかけてのそれぞれ独立した論文から構成されているが、全体は緊密に組織づけられた有機的総体をなしている。

序文と第一章、「中世哲学研究の現況」に続く主要部分は第Ⅰ部、「教父時代における中世思想の基礎づけ」第Ⅱ部、「言葉と知識」第Ⅲ部、「自由と至福」第Ⅳ部、「自然と存在」に区分されている。

本書は序文に示されたように、キリスト教信仰という共通の確信ゆえに中世思想全体に具っている深い統一性を把握し、その精神的多様性の中に中世哲学の根本的動向を解明することを目指しているが、そのために偉大な思想家との哲学的神学的対話を通じて中世思想の中心的主題に対して歴史的体系的展望を開くような諸問題を考察する。この書の特色は、古典ギリシアから教父、中世を経て近現代に至るまでの思想、哲学に精通している著者がその該博な知識を駆使して重要なテキストに関する詳細な引用と豊富な参考文献の紹介に努めていることにある。とりわけ註におけるラテン語原文の多岐にわたる適確な引用はたんなる啓蒙的配慮に留まらず、叙述との正確な対応によって多くの豊かな教示を含んでいる。

第Ⅰ部の始め第二章「使用と観想——文化と宗教の関係についての教父思想の二類型」は教父時代を特徴づけるキリスト教信仰の文化に対する思想上の態度をラテン教父のアウグスチヌスとギリシア教父のディオニュシオス・アレオパギテスを代表として論じたものであるが、前者の態度を「正しい使用」と規定し、後者が文化を象徴として把握したことを展開していて、難解ではあるが論旨は明確である。広汎な知識に裏打された深い洞察によって格別に秀れたこの論文は、著作全体を貫くモチーフであ

る「理解を求める信仰」と深く関わるゆえに、冒頭を飾るに相応しい。ついで第三章ではピュタゴラス学派の数学、ストア派新プラトン主義の倫理学、アリストテレスの論理学に及ぶ古代哲学を中世思想に架橋したポエティウスを、第四章では初期スコラ学に至るまでの修道院文化の発展を歴史的に精細に辿ることによって導入部としての第一部は終る。

本書の主要部は人間の言葉についての理論としての論理学、人間の実践の理論としての倫理学、人間の所与でありつつも人間を超える自然的存在の秩序の理論としての自然学という古代の学問分類を中世において新たに解釈し直すという意図のもとに「言葉と知識」「自由と至福」「自然と存在」という三つの問題が展開される。

第Ⅱ部ではアウグスチヌスの「内的な言葉」の発見に始まって「被造物の声と言葉を超える讃美」が語られ（第五章）、ついで12世紀サン＝ヴィクトルのフーゴの学問体系がその『学習論』を通じて述べられ（第六章）、ポーヴェのウィンケンティウスの百科全書の著作による教養理解の歴史的叙述（第七章）を経て、トマス・アクィナスの言語哲学に至る。トマスはアウグスチヌスの言語理解を言葉の形而上学にまで展開し、対人格的な意志伝達の遂行としての言葉に注目して、神について語ることの意味論的構造をも分析したものとして把握される（第八章）。

第Ⅲ部では人間の完成についての問いのもとに、倫理学を基礎づける自由、人間的行為の構造、人間の目的としての至福が考察される。まずアンセルムス、ベルナルドゥス、アベラルドゥス、ロンバルドゥスに至る初期スコラ学と、アリストテレスとの対話を通して展開されたトマスの神学的倫理学にもとづく至福論が第九章で述べられる。

自由論に関してすでに大著を刊行されている著者が自由の問題について主題的に取上げたのは、救済論という神学的地平との関わりにおいて導入された自由を『命題集註解』で論じたボナヴェントゥラ（第十章）および、至福への欲求と自己完成を求める倫理的行為と、神との存在論的関係を統一的に把握しようとする伝統的理解が、そこにおいて破られることになる後期スコラの代表者ウィリアム・オッカム（第十一章）である。

トマスの最後期の著作における自由論との対比による批判的叙述も見られるが、「偉大な思想家との対話」という本書の一貫した基調は維持され、抑制は保たれている。とりわけ「神の二重の能力の説」によって、神学的に基礎づけられた実践の優位

性から理論哲学と実践哲学の分裂に至るオッカムの学説の叙述は興味深い。

第Ⅳ部は本書の中核をなすものであって、創造の思想を思索の根底に据えて自然と存在の関係が問われる。創造のもとに被造物として把握された自然の多様な理解が歴史的に教父時代から後期スコラまで精細に考察され（第十二章）、ついで聖書における創造思想を主題化したアウグスチヌスの自然理解がその著作の綿密な読解を通して考究され（第十三章）、第十四章ではアリストテレスの形而上学を背景として展開されたトマスの自然理解が、自然の統一とその始源としての神、自然の秩序とその目的である神との関係において包括的に論じられ、自然の考察は自ら超自然へと向うことになる（第十四章）。第十五章は「トマス・アキナスにおける存在理解の展開」であり、第十六章は存在理解の展開の可能性を探って「存在と思惟」の問題が形而上学の根本問題として論じられる。第十七章では「トマス・アキナスにおける神認識の構造」が考察される。存在の諸規定を展開する精神が同時に存在そのものの顕現を受取ることによって自らを構築する、という二重構造はその根源的形態を神認識の構造に対する問いにおいて獲得するからである。存在と精神をめぐる問題は「知性論と神秘思想」（第十八章）によって閉じられる。

十四章から十七章は、本書の中心であり、著者の永年の研鑽によるトマスの存在論の統一的把握であり、著者の本領とする超越論的思索の結実としての力作である。したがって卒読では容易に把握し難く、堅固で緻密に構成されている本書は、立入った研究の対象となることが望まれる。

創造論、救済論という神学的課題をも視野に収めて教父から後期スコラに至る哲学の展開を述べた本書の内実は中世哲学の「源・流」であり、その深化発展であるのだから、「源流」という題名では不十分であるように思われる。

また、本書の意図からは逸れることになるが、予想される課題はたとえば第Ⅱ部においては現代の言語哲学との批判的対比であり、第Ⅳ部においては現代哲学との対話を通してトマスの存在論の現代的意義を更めて問うことであろうと思われる。もちろんのこと、これは本書に対する批判などではなくて、学識豊かな著者に対する期待に満ちた希望なのである。